

十人十色の、ミライを咲かせる

2019 神奈川県公立高校入試 問題分析資料

さくら個別指導塾

2019 英語-①

- ・問題形式、配点は昨年度から大きな変更はない一方、問6・8の長文読解の分量が増加する、細かな変化は見られ、全体として昨年並みかやや難化したと言える。
- ・長大化した英文をいかに時間内で読み切るかが重要だった。

	出題傾向の変化/出題の特徴	学習のポイント
問1 リスニング	(ウ)No.1は昨年同様、英文を聞き取った上で簡単な計算が必要な問題だった。同No.2はweatherを書かせる問題。放送された英文のなかには無い語で、内容を咀嚼した上で、ふさわしい語を考える必要があった。	リスニングの配点は21点と全体の2割を占め少なくなく、この傾向は今後も続くと思われる。日頃から意識的に英語を聞く機会を増やし、リスニング力を上げていくことが必要。
問2 適語補充	例年通りの対話文中の単語の書き取り問題だが、今年はbe bornやfor example、continue to等、熟語として把握しておくべきものからの出題となった。特にcontinueの綴りは難しいと感じる受験生が多かったのでは。	単語力を付けていくことはもちろん、それぞれの単語が実際にどのように使われるのかという語法にまで踏み込んだ学習をしていくことが大切。
問3 適語選択	こちらも出題形式は例年と変わらず。(ア)はone of +名詞複数形、過去時制の関係代名詞が複合した問題で、基礎とはいえ細かな知識の理解を問う問題だった。その他に関しては比較、接続詞whenと時制の一致、前置詞duringの用法を問う昨年並みの難度の問題だった。	4択の選択肢問題ながら、文法事項への正確な理解が問われる問題だった。あいまいな理解を潰していく学習が必要。
問4 語順整序	例年通り、語順整序作文問題。(イ)は感情を表す形容詞+to Vの形で、動詞がbe動詞でないという、一般的な教科書には無い用法を問うており、難しかった。(ウ)をスムーズに答えるにはwatchが動詞「見る」ではなく名詞「腕時計」であることに気づく必要があり、やや難しい問いだった。	(イ)を除けば、一見難しく見えるが落ち着いて答えれば一般的な難度。問3と同様、文法への正確な理解が問われる。

2019 英語-②

	出題傾向の変化/出題の特徴	学習のポイント
大問5 条件作文	例年通りの、イラストと英文を元にした条件英作文。will be able toの用法を理解していれば比較的簡単に書けた。	コンマの後から書き始める問題であるが、注意しなければ冒頭を大文字にしかねず、減点の対象となってしまう。解くスピードの問われる入試ではあるが、冷静に一問一問を見ていくことが大切だ。
大問6-8 長文	<p>・問6 例年通り、スピーチの長文読解だが、やや分量は増加した。扱うテーマは地産地消とフードマイレージ、食料自給率と現代的で、語彙、文法ともに注釈はあるものの中学での学習範囲を超えたものが多く、読むのに手間どう受験生が多かったと思われる。社会科の知識が読解の助けになる。(ウ)は、本文の内容に合うものを選択肢から2つ選ぶ問題。それぞれの選択肢が本文内容の表現を微妙に言い換えており、内容の正確な理解とともに文法知識が問われた。</p> <p>・問7 英文と図表の読み取り。昨年同様、小問数は2問。いずれも図表と問を先に見た後に英文を読むことで解答にかかる時間を短縮できる。(イ)は、インターネットで調べたある目的地までの経路のうち、最適なものを選ぶという今風のテーマだった。</p> <p>・問8 対話文読解。昨年より長大化しており、読み切るのには時間がかかる。未習語も多いため、各文を逐語的に訳すのではなく、大まかに必要な内容を読み取っていく情報処理能力が問われた。テーマは災害対策。とくに、登場人物たちが作ったハザードマップを選ぶ(イ)は、正確に答えるためには文章全体の半分ほどをしっかりと読み込む必要があり、難しかった。</p>	ただでさえ多かった長文の分量が半ページ分ほど増加し、読み切るのに苦労した受験生が多かったと思われる。読解のスピードを上げられるよう、日頃から英文を読み慣れていくことがまず必要。扱われるテーマは実際の社会生活に根ざしたものが多く、そうした知識があれば、英文を理解できずとも内容をつかめる可能性がある。社会科の知識、日頃のニュースのチェックも読解の助けになる。

2019 数学-①

- ・マークシート方式と記述問題の両方での出題となり、昨年同様、難しい問題を記述で答える傾向となった。
- ・証明問題では傾向が変わり、これまでにない初めての出題パターンとなった。計算、関数、確率、空間図形は例年通りの出題傾向となったがレベルの高い問題が目立つ。
 - ・出題傾向の変わらない基本問題を確実に正解する力を身に付け、配点の高くなった思考力の試される問題に多く触れていく必要がある。

	出題傾向の変化/出題の特徴	学習のポイント
問1 計算	例年通りの計算問題で昨年同様、解答は全てマークシート。ミスをせずに全問を正解したいレベル。	出題される計算はパターンが決まっているので、早く正確に解く訓練をする。
問2 小問集合	因数分解や2次方程式、変域など過去の出題傾向と同じ出題となった。不等式は割合を絡めた文字式での出題であった。この割合については文字式が出題されはじめて以降よく出題されてきたので、対策をしてきた受験生は多いと思われる。また今年初めて標本調査の単元から出題があったが、基本的な問題であった。	因数分解や方程式は過去問を解き、傾向に慣れておく。その他の問題も他の都道府県ではよく出題されるオーソドックス問題なので、様々な基礎的な問題を取り組んでいく。
問3 図形と方程式	昨年問3は図形と文字式の2問の出題であったが、今年は3問となった。(ア)(イ)の図形では円周角と面積比の問題で、どちらも補助線が必要であった。円周角は標準的なレベルであったが、面積比の問題は難度が高かった。(ウ)では方程式を作る問題であった。中1の方程式の文章題で代表的な過不足の問題であったが、指定されたxを使い立式するのが難しかったと思われる。	求角や線分比、面積などのような図形の応用を多く解いて汎用性のある解法を身に付ける。文字式や方程式などは教科書にある基礎問題を少しひねったような問題に慣れておくが良い。

2019 数学-②

	出題傾向の変化/出題の特徴	学習のポイント
問4 関数	例年通りの出題傾向となった。(イ)では座標が分数となり、求めたい点の座標を計算するのに例年よりも手間多い印象である。昨年と比べるとよりレベルが上がった。(ウ)は毎年難しい問題が出題されるが、今年も同様に難度が高い。	座標を導くまでの手順がある程度パターン化されている。そのパターンを身につけるため、過去問に触れていく。 比や図形的性質を使って座標を求める訓練、座標が分数になっても処理できるような計算力を身に付けていく必要がある。
問5 確率	これまでは図形や数の性質を利用するため難しくなった問題が多かったが、昨年から試行のルールそのものを複雑化した問題となった。その傾向は今年も同様で、場合分けをして丁寧に処理をしていく必要があった。問題文の内容を把握し素早く数えていく力が必要となった。	まずは問題文の内容を読み取れるよう、複雑な試行をする確率問題に触れておく。時間との勝負となることもあるので、時間配分の仕方を身に付けておくが良い。
問6 空間図形	(ア)と(イ)は過去の出題と同じパターンで、大きな変化はなかった。(ウ)では最短距離を求める問題でよく出題されるパターンであったが、展開図を丁寧に書き補助線を引きながら長さを求める、難度の高い問題であった。	出題傾向がある程度決まっているので、図形問題を解く上での着眼点を身に付けていく。三平方の定理や相似は必ず使うので、まずは平面図形での解法から固めていくと良い。
問7 証明	ここ数年で毎年傾向が変わっている証明問題だが、今年も変化があった。(ア)では基本的な証明の穴埋め問題が出題され、(イ)では二等辺三角形となるときの条件を記述させる、はじめての出題とであった。(ウ)では相似と三平方の定理を使い、辺の長さを出す問題であった。答えに至るまで多くの計算が必要となる。	今後の証明問題がどのような出題になっても良いように、過去の傾向は押さえておく必要がある。ここ数年では根拠となる事柄を答える問題が目立つので、単純な証明問題だけでなく、定理そのものへの理解を深めていくと良い。

2019 国語-①

- ・昨年の問題形式からの大きな変更は見られなかった。物語文、論説文の文章が難しくなったが、各問題の選択肢は比較的容易に絞り込めるものが多かった。難易度的には昨年と同じくらいかやや難化。
- ・問5の資料と対話文の読み取りは、今年も問題文からの書き抜きでは対処できないもので、昨年の問題を参考に対策は可能だったとは言え、難しい問題だった。

	出題傾向の変化/出題の特徴	学習のポイント
問1 語彙・文法	例年通り、漢字と文法、俳句の読み取りの問題。漢字の読みでは、今年も「彫塑」等漢検準2級～2級レベルの問題の出題が見られた。文法は接続助詞の「で」について問うもの。用言、体言のどちらに接続しているか、用言の活用語尾ではないかを見極めて答える必要があった。俳句の問題は、心情についての余計な記述が含まれた選択肢を削れば答えられる易しい問題だった。	漢字の読みや文法等、一部に難しい問題も見られるが、配点は大きくない。取れるところを確実に取ることが大事。まずは漢検3級レベルまでの読みと書きをしっかりとやること。
問2 古文	古文の読み取り。出典は江戸時代中期の『実語教童子教諺解』。文章自体の難度は、成立が比較的新しいものであることもあり高くはなかったが、(ア)(イ)は傍線部の後に答えの根拠になる部分があり、文全体の流れをよく理解したうえで答えることが大切だった。一方で、主語や発話者を問う問題はなかった。	注釈や傍注をよく読み、文の内容をし押さえることが重要。読むこと自体が難しいというレベルの文章はめったに出題されないの、古文だからと気負わないようにしたい。そのためにも、問題演習を通じ古文を読むことに慣れていこう。
問3 物語文	出典は原田マハの『たゆたえども沈まず』で、19世紀末のパリを舞台に、実在した日本人画商の林忠正と画家フィンセント・ファン・ゴッホとの交流を、忠正の助手である「重吉」(彼は架空の人物である)の視点から描いた作品。3年連続で、明治期を舞台とした作品からの出題となった。「たゆたう」や「滔々と」といった難解な語が多いうえに心情の直接的な描写が少なく、登場人物の心中を読み取るのがやや難しい作品だが、各小問の選択肢はいずれも、本文に書かれた事実関係を正確に掴めていれば絞り込めるもので、昨年より易しかった。	ここ数年、現代を舞台としない作品が続いている。日頃から、意識的に様々なジャンルの小説に触れることが、地力の向上に。各設問の選択肢は難しくはないものの、ひとつひとつが長大。長い選択肢はいくつかに区切り、本文との対応をそれぞれのパーツごとにチェック。

2019 国語-②

	出題傾向の変化/出題の特徴	学習のポイント
問4 論説文	<p>論説文。堀内進之介「人工知能時代を〈善く生きる〉技術」からの出題。文章は、「あたらしい技術」=AIによる自動化が社会に激変をもたらすなかで、どのようにより良い「あたらしい社会」を模索していくべきかを論じたもの。「ルーティンワーク」等、大人にとっては耳慣れているが、受験生にとってはその意味をイメージしにくい用語が多く、また(イ)等、その理解が答えの選定に影響する設問がいくつか見られた。「主体」と「客体」といった一般的な批評用語の把握も重要だった。文章全体についての理解を問う(ク)は、紛らわしい選択肢を含んでおり、正確な読み取りが求められた。</p>	<p>AIという現代的なテーマを扱った文で、カタカナ語も多く、話題や用語に馴染みがなければ読みにくさを感じたかもしれない。世の中の動きに関心を持ち、様々なトピックを扱った文章に触れておくことがまず重要。一方で、従来通りの批評用語の理解も大切。わからない言葉はそのままにせず、意味を確認しながら学習していこう。</p>
問5 資料の読み取り	<p>資料の読み取り問題。(イ)の記述問題は、昨年度より、対話文中の文言を抜き出してまとめるという方法では対応できなくなり、難化していたが、今年もその形式が続く形になった。対話と表・グラフを総合的に見たうえで「紙製容器包装」「雑がみ」といったキーワードを読み取る必要があり、難しかった。(ア)の選択肢問題も、図に直接的に書かれてはいない数値を計算したうえで答える必要があり、昨年と比べても難しくなった。</p>	<p>おそらく、今後も単純な書き抜きとまとめでは対応できない形式での出題が続くと思われる。神奈川県のみならず、他の都道府県のような記述問題にも触れ、地力を伸ばしていくことが大切。資料の読み方についても同様で、国語だけでなく、社会科の問題等にも多く取り組み、図表の見方を身に付けていく必要がある。</p>

2019 社会-①

- ・おもに地理分野が大きく易化し、全体としての難易度は下がった。
- ・基本的な知識を問う問題が多く、複雑な情報の処理が必要な問題はほぼ無くなった。一方で、複数の選択肢のなかから正しいものの組み合わせを選ばせる問題の数が増え、あいまいな理解では答えられない問題は多かった。基本事項の確実な定着が鍵。

	出題傾向の変化/出題の特徴	学習のポイント
問1 世界地理	<p>難度の高い問題の多かった昨年に比べ、基本的な知識を問う問題となった。また、メルカトル図と正距方位図を組み合わせる例年の形式から、文章とメルカトル図の組み合わせへと変化した。(ア)(ii)の時差の問題は大幅に易化し、日付変更線の基本的な理解を問うものになった。(イ)(ii)はナイジェリアとベネズエラ輸出品目を問うもの。原油の主な地下資源の産出地が掴めていれば解けた。(ウ)はある地域の気候と産業の関係を問う問題。昨年に比べ、問題内で与えられた情報が多く、答えやすかった。(エ)は地図とグラフを読み取り、割合を求める問題。割合について基本的な理解ができていれば、計算は必要なかった。</p>	<p>特色検査に共通問題が採用され、実施校が増えていくのに伴って、複数の知識やデータをもとにした複雑な問題はそちらに移行したのか、昨年に比べるとかなり易くなった。各地域について、地図と気候、主要な産業の基本事項を押さえることが今まで以上に重要となる。</p>
問2 日本地理	<p>世界地理同様、昨年に比べ易くなった。(ア)は表とグラフを読む問題。割合を問われているが、割合の意味が分かれば計算の必要はない。グラフは主な石炭の産出国と日本の輸入先を示したもので、理解には世界地理の知識も必要だったが、問うている内容自体は基礎的。(イ)は再生可能エネルギーについて問うもので、こちらも基本的な問題だった。(ウ)は地形図の問題。昨年は難問が多かったが、今年は地形図の読み取りの基本が理解できていれば問題なく解ける難易度だった。(i)は日本史との融合問題だが、聞かれているのは基本的な事項であり、複雑な思考も必要なかった。</p>	<p>世界地理と同じく、かなり易くなった印象。地形図の読み取りも大幅に易くなったが、基本的な知識はしっかりと問われている。分野横断的な問題も基本的な知識を問うものとなっており、まずは基本事項を押さえていくこと。</p>

2019 社会-②

	出題傾向の変化/出題の特徴	学習のポイント
問3 近代以前の歴史	交通・交易に関するテーマ史。(ア)(ウ)は世界の歴史の知識も含め、出来事の前後関係を問う問題。おおよその歴史の流れを押さえられていれば、問題自体は難しくないが、世界史の知識に抜けがある受験生も多かったのでは。(イ)(カ)はそれぞれ墾田永年私財法、楽市・楽座の内容について、記述を含めて答えるもの。記述問題ではあるが、基本的、かつ頻出の内容。	昨年に引き続き、出来事の前後関係を問う出題。暗記だけではなく、出来事の大まかな流れをそれぞれの意義を含めて押さえられていることが大事。年表の暗記だけでなく、因果関係を意識した学習を。
問4 近代以降の歴史	アジア史の体裁を取った問題。(イ)はインド大反乱の発生原因を把握したうえでグラフを読み取る必要のある問題で、難しかった。(エ)は日本の第一次世界大戦時の同盟関係と参戦理由、およびワシントン会議の内容について問う問題。それぞれ第二次世界大戦時の同盟関係、パリ講和会議と混同しやすく、知識をきちんと整理できているかが問われた。(ウ)(オ)はいずれも出来事の前後関係の把握が問われた問題。近代以前の歴史と同様、通史的な把握が必要だった。	近代以降の歴史では、二度の世界大戦、各国同士の関係が複雑に絡んだ出来事が増えてくる。それぞれの時点での各国の関係性を整理して押さえしていくことが大切。また、歴史全体について、出来事間の前後関係を問う問題が増えているので、通史的な視点で整理することも必要。
問5 公民 憲法・人権・政治	例年通り、人権と憲法、政治の仕組みについての問題。昨年より難易度に大きな変化はなく、基本的な事項をしっかりと理解できていれば、きちんと得点できる問題だった。(ウ)(ii)は、日本の歳入と歳出の推移を示したグラフから、公債金収入と国債費とを表したものを選ぶ問題。それぞれについての原理的な理解とともに、現在の日本の財政状況についての知識も問われた。	これまで同様、一問一答形式の問題で、基本的な事項をしっかりと覚えていくことがまず大切。理解の問われる箇所については、一問一答の問いと答えを逆にして、用語についての説明を書けるように練習していくことが大切。
問6 公民 経済・国際	問五同様、基本的な問題が多かった。記述問題も無くなり、難易度的には昨年よりやや易くなった。(ア)は毎年出題されている為替と貿易についての問題。とくに為替に関しては、例年原理的な理解が問われる問題が出題されている。為替変動の仕組み、貿易に与える影響は確実に理解しておきたい。	例年、原理的な理解を問う出題が目立つ。為替、需要と供給に関しては、しっかりと仕組みを理解していくこと。出題形式も、単純な選択肢だけでなく、記述やデータの読み取りを絡めたもの等、様々なものがありうるので、問題演習も重要。

2019 理科-①

- ・昨年まで難度の高い問題が目立った入試であったが、今年は基本知識で解ける問題が増えた。一方で思考力を問われる問題は変わらず出題された。
- ・昨年までと比べると求められる力は変わらないが、問題の質や選択肢の質が易くなった印象。出題の順番は例年通り。

	出題傾向の変化/出題の特徴	学習のポイント
問1 物理小問	エネルギーの移り変わり、光の屈折、電流に関する問題。(ウ)は電流の大きさに関する問題で、このような数値の大きさを比較する問題は過去にも出題されている。	基本的な知識を身に付けておくことは必須。 その上で、他の都道府県でよく出題される基本問題を解き、理解を深めていくことが重要。
問2 化学小問	ガスバーナー、質量保存の法則、中和の問題。基本知識で解けるものが多かった。例年の出題ではもう一捻りあるところだが、シンプルな出題となった。	
問3 生物小問	顕微鏡、食物連鎖、植物の分類の問題。(ウ)の植物の分類では、具体的な植物がどの分類に属するかという細かい知識が必要であった。過去によく出題されてきた遺伝の法則は出題されなかった。	
問4 地学小問	火山、前線、地震の計算の問題。(イ)は寒気と暖気の動きを判断する問題であったが、入試問題ではよく見かける問題である。地震の速さの計算は、地震の仕組みへの問いというより算数的な計算問題となった。	

2019 理科-②

	出題傾向の変化/出題の特徴	学習のポイント
問5 浮力の実験	物体を水中に沈めていき、ばねばかりを使って力の大きさを測定するという、よく出題されるパターンの問題設定であった。浮力と体積との関係性を理解し、実験結果から浮力の大きさを求める問題で記述で答える問題も出題された。	差が出るのは問5～問8の中でそれぞれ2問ずつくらい。基本は全て正解し、いかに応用問題を解けるようにしていくかが今後のポイントとなる。 神奈川県の過去問をやる前に他の都道府県入試の中で代表的な実験の問題に触れ、今年の難度と同じくらいの問題を解いておく。 基礎知識で解ける問題では正解を導けるよう、基礎を固めることも大切。知識が身に付き、思考力のトレーニングを行ったのち、神奈川県の過去問をやりレベルの高いものに触れておくと良い。
問6 鉄と硫黄の化合実験	鉄と硫黄の化合に関する実験の問題。基礎的な知識で解けるものがあり、出題傾向の高い化学反応式のモデル図の出題もあった。例年通り、会話文を読み、仮説を立てていく問題もあり、グラフを使って数値を求めていく力が必要であった。	
問7 だ液の観察	生物分野の出題としてはよく見られる問題で、過去にも出題された、だ液によるでんぷんの分解に関する実験の問題であった。基本知識で解ける問題の出題もあったが、(工)では立てた実験から検証される仮説を選ぶ問題が出題され、思考力が問われる。	
問8 太陽の日周運動	太陽の観察に関する問題で、問題文に南中高度を求める公式が示されていた。(工)では地軸の傾きが変わった場合の南中高度について考察をする問題が出題されたが、H25年の入試と傾向が似ている。公式を示されていたので、その公式に当てはまるだけで解ける問題もあった。	